

12月5日の職員会議の後半は、職員研修として生徒の授業アンケートの結果から本校の授業づくりの課題（資料↓）を全職員で共有しました。

生徒の「本音」から見えた、これからの授業のヒント

生徒の「本音」から見える現状と課題

授業の「型」は定着、でも「楽しさ・実感」には大きな差

「やればできる」自信の裏にある、高い学習ストレス

学習はテスト前の「短期集中型」。求めるのは対話的な学び

日常的な学習習慣 テスト前

生徒の学習動機と学習習慣の現状

学習する最大の理由: 「高校進学・将来のため」
(学習意欲が「テストで点を取ること」に集中やすい)

普段の家庭学習時間: 「ほとんどしない」「30分～1時間」
(テスト前との学習時間の変化が読み取れる)

集中を妨げるものは: 「スマホ等で気があがくことが多い」
(多くの生徒が学習意欲に影響を抱えている)

生徒の学びを次へ導く3つの提言

1. 「主体的・対話的で深い学び」の推進

「どのように学ぶか」を指導、自らの学習を管理する力を育成

2. 学習の「自己調整能力」を育む支援

3. 学習意欲と自己肯定感を高める動機づけ

学習内容と社会・未来との繋がりを示し、結果だけでなくプロセスも評価

社会・未来
つながり
プロセスも評価

教科	教科が好きになる手立て
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・動画を視聴したり生徒がシンプルに疑問を抱くような素材を取り上げて考えたりする時間（生徒が楽しく感じるような時間）と、教科書に載っている学習面で大切な事柄をおさえる時間（知識や技能を獲得する時間）を分ける。 ・シンドラーのリスト、NHK for school、Amazonプライム日本の歴史、三国志など、生徒が興味を持ちそうなコンテンツをアンテナを高くして取り入れる。 ・教科書に沿った内容を授業で取り上げる際にも、満足感を感じる内容が生徒によって違う。ディスカッションをして自分の考えを聞いてもらうことで満足する生徒もいれば、歴史の流れを把握して満足感を得る生徒もいる。さまざまなパターンの授業ができるようにしておく。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ・帯指導的に計算技能やその単元の基礎技能の練習を行う⇒自身の技能の伸びを視覚化する（寿司打のような感じ） ・単発的に興味をひける題材（ハイジのプランコ、ナスカの地上絵、測量…）はあるが…持続的に興味をひきつけるのが難しい ・学習方法、多様なアプローチの仕方を教え、自分で調整しながら勉強に取り組む経験を積ませる。
理科	<p>「うるう年があるのは何で？」など、素朴で興味がわく疑問を提示する。</p> <p>逆に目に見えない世界の指導の際は興味がわきづらくなる。（化学変化など）</p> <p>実験などの操作的な楽しさはあるが、理科の本質的な楽しさに結びついていないような…</p>
国語 英語	<ul style="list-style-type: none"> ・小さなゴールから大きなゴールへ。 ・先生も楽しむ。 ・問い合わせの連続。生徒たちの思考を止まらせない。なぜ？どうして？と考えさせる問い。 ・教え込みない。自分でやりたいをかなえさせる。 ・楽しい！やった！できた！と生徒が思えるゴールの研究をし続ける。 ・コミュニケーションが好きな生徒が多い。そこを生かす。 ・できるぞ。やれるぞ。と思わせる体験を多く積む。 ・クイズ形式の楽しめるエンターテイメントも忘れない。 ・インパクト。（エピソード記憶） ・インプット⇨アウトプット
音楽 美術	<ul style="list-style-type: none"> ・とにかくほめる、人前でほめる ・相互鑑賞 ・得意なものをたくさん ・座学を減らす、活動を増やす ・オンラインワンドということを伝える ・自分の「好き」を伝える！
体育	<ul style="list-style-type: none"> ・できると楽しい ・ゴールがはっきりしているから、目的がわかると楽しい。ゴール：技ができる、勝てる、演技を認められる ・競技スポーツではなく、実態に合わせたルールや道具。スポーツをいかに体育の教材にするか。 ・選択できる環境。バレーボール、正規コートルールでやるコート、ソフトバレーに近いコートなど。 ・そのスポーツの楽しさや特性を伝える。例えば跳び箱は高さではなく美しさ。
技術	<ul style="list-style-type: none"> ・学ぶ意味、教科の本質を伝える ・具体的な制作を通じた「達成感」 ・学んだことが生活や社会でどのように生きるのかが明確→すぐに分かるとなおよい ・主体的な取り組みがやはりよい。技術だと設計やプログラミング。目標に向かって試行錯誤できる機会を増やす ・「面白そう」と思わせる導入 ・評価の透明性の確保とプロセス評価
家庭科	<ul style="list-style-type: none"> ・学校で学んだことが、日常生活でどう生きるのか理解できる。 ・調理実習では、生徒主体でできるように味付けや手順などをグループで相談してきめるようにする ・生徒に評価規準を提示して、どこまでできればA評価がとれるのか可視化する。

生徒の意見をもとに「自分の教科を好きになってもらおうにはどうすればいいか」というテーマで、先生方と授業づくりについて話し合いました。

研修の時間が終わった後も熱心に授業づくりについて話し合う先生方がみられました。

←先生たちから出された意見